



工藤篤子メールマガジン35号 2003.09.23

●「エベネゼル緊急基金」 ●エベネゼル・ドイツ大会 ●「死の家」から「生の家」へ

秋の気配が感じられ、自然が美しい季節になってまいりました。

皆様お元気でいらっしゃいますか？いつもお祈り、ご支援くださり、お礼申し上げます。

一日だけと思っていたエベネゼル・ドイツ大会での賛美は、9月12日～16日までの5日に渡っての奉仕となり、それぞれ素晴らしい祝福の時となりました。皆さんのお祈りに感謝いたします。

今回の奉仕は、マリア福音姉妹会で、私がひょんな人違いをしたことがきっかけでした。実は私は、ひげの生えた背の高い50代の男性を見て、昨年ここでお会いしたバーチ司祭だと思い、挨拶をしたのです。でもその方の名札を見ると、バーチではなく、ザースマンという名前が書かれてありました。

「ごめんなさい。人違いでした。あなたがエベネゼルの働きをなさっているバーチ司祭によく似てらっしゃったものですから。」とお詫びをすると、

「私はバーチの同労者で、エベネゼル・ドイツ支部代表のヒンリッヒ・ザースマンです。妻はエルケと言います。ドイツの支部はハンブルクにあります。・・・えーっ、あなたもハンブルクに住んでいるのですか・・・えーっ、あなた、福音歌手！？・・・」

その後の会話は皆さんのご想像のとおりです。

●「エベネゼル緊急基金」

皆さんは「エベネゼル緊急基金」という働きをご存じでしょうか。北の国、主に旧ソ連諸国からユダヤ人のイスラエル帰還を助ける働きをしている団体です。船をチャーターし、ウクライナのオデッサ港に一時宿泊施設を設置し、救援物資の供給、港や空港までの旅費、その他の出費を全額負担するなど、帰還にかかわるすべての助けをしています。また単に帰還希望者の手助けをするだけでなく、迫害を避けて奥地に隠れて住んでいるユダヤ人を積極的に探し出し、イスラエル帰還の「よき知らせ」を伝えてきました。この働きを、彼らは「出エジプト作戦」と呼んでいます。

1991年以来、「エベネゼル緊急基金」が帰還を助けたユダヤ人の数は10万人を超えます。

エベネゼルとは、ヘブライ語で、第一サムエル記7:12に書かれてあるエベン・エゼル、つまり「ここまで主が助けてくださった」という意味です。

それゆえ、見よ、その日が来る。・・・主の御告げ。・・・その日にはもはや、『イスラエルの子らをエジプトの国から上らせた主は生きておられる。』とは言わないで、ただ『イスラエルの子らを北の国や、彼らの散らされたすべての地方から上らせた主は生きておられる。』と言うようになる。わたしは彼らの先祖に与えた彼らの土地に彼らを帰らせる。(エレミヤ 16:14-15)

このみことばは、エベネゼルの大きな働きによって成就しつつあります。

●9月13日、エベネゼル・ドイツ大会

13日(土)に、10時、15時、19時の三回に渡って、ハンブルクのエリム教会を借りて、大会が行われました。

☆賛美の時

賛美の時は、ドイツ支部のリーダーの奥さんであるエルケ姉妹によって導かれました。彼女は、ご主人と共に、ドイツ・エベネゼルのリーダーとしての役目を果たしているだけでなく、歌、ギター、ヴァイオリン、フルート・笛をこなすマルチ・ミュージシャンでもあります。私は彼女からの目の合図によって、ソロの賛美を挿入してゆきました。

私は、母の死後、忙しさも相まって、気分的にも2ヶ月近く歌えない状態が続きました。この日はまだ声が本調子になりきれない状態でしたが、賛美の時には、導かれるように声が出ました。後で、あなたのような霊的賛美をいまだかつて聞いたことがありませんでしたと何人かの方から言われましたが、それは、豊かな御霊の御臨在によるもの以外のなにものでもありませんでした。大会に集まった人たちの信仰が会場を御霊で満たしたのです。

大会では、アメリカ、ロシア支部の代表が、エベネゼルの働きと、報告、そしてこれからのビジョンを熱く語りました。主のみこころを全うしようとする働きがどんなに困難を伴うものか、またそのためにどれほどの祈りが必要であるかが、アピールされました。

☆フィッシャーの働き

私たちの心を最も打ったのは、これまで奉仕をしてきたフィッシャーたちの証しでした。エレミア 16:16「見よ、わたしは多くの漁夫をやって、－ 主の御告げ。－ 彼らをすなどらせる。」に従い、ユダヤ人を集める働きをする人たちをフィッシャー（漁師）と呼んでいます。世界中から集められた数百人のフィッシャーたちが、3ヶ月の単位で、無給で人生の一部を失われたユダヤ人を帰還させる働きに捧げています。その中には、現在2名の日本人も含まれているそうです。

フィッシャーのほとんどが20代、30代の、それぞれ主からみことばをいただき、明確な召命を受けて参加した若者たちです。この人たちは北の国で、不思議な主の導きによって出会わせてくださったユダヤ人の、物質的、肉体的、精神的苦悩と一体化し、彼らを助ける働きをしたのです。それは容易なことではないはずです。しかし「漁師の働きは、イエスを愛し、イエスの苦しみと一体化することです。そこにこそ真実の喜びがあるのです。」と語るフィッシャーの顔は、天使のように輝いて見えました。

*9月15日にはホロコースト生存者の集いがありましたが、内容が余りにも濃いため、数日後、別便のメルマガで報告させていただきます。

「死の家」から「生の家」へ

ところで、ハンブルクのエベネゼルは、メスベルク1番地のコントーアハウスというビルの一階に事務所を構えています。ここには、19世紀末、アルベルト・バリンというユダヤ人がバリン・ハウスと名付けた大きな建物を所有していました。彼は、ハンブルクでは有名なHAPAG（ハパック、今ではハパック・ロイトと改名し、航空会社も経営している）という船舶会社の創立者です。しかし、第一次世界大戦で事業に行き詰まったバリン氏は、睡眠薬自殺という悲劇的な死を遂げました。その後、1924年、ユダヤ人建築家であったオスカー兄弟が、ここに10階建ての建物を完成させました。それは、コントーアハウスと呼ばれています。ここは、当時ハンザ同盟都市ハンブルクの経済中心地であったところです。

1942～1944年のウクライナのユダヤ人大量虐殺に使われた毒ガス、シアン化水素が、1946年、英国軍によって、このコントーアハウスの2階にあった「テッシュ&シュターベノウ」という会社で作られていたことが明らかにされました。ユダヤ人によって建てられたこの家は、皮肉なことに、大量のユダヤ人を殺害する素を送り出す場所となったのです。

その後、「この呪われた建物が神の祝福で満たされますように」と、何十年も祈ってきたクリスチャンがいました。そして、2000年、その建物の一階に、エベネゼルのドイツ支部の事務局が入ったのです！多くのユダ

ヤ人を死に導く「死の家」が、多くのユダヤ人を祖国に導く「生の家」となったのです。しかし、この事務所の契約は2004年の1月で断ち切られることになっています。ドイツ・エベネゼルは、主のみこころであれば、主が奇跡を起こして今の場所に留まらせてくださるよう祈っています。そうでなければ、もっと広い事務所が与えられるよう祈り求めています。

エベネゼルの働きは大きな働きゆえに、攻撃も多いと聞きました。どうぞ、主のみこころがエベネゼルを通して着実に前進してゆきますよう、お祈りください。

主の祝福と平安が皆様と共にありますように

シャローム

工藤篤子